

京都ノートルダム女子大学  
日本年中行事論:特別授業  
令和5(2023)年10月26日

# 綿から綿へ



— ひと粒の種が布になるまで —



## 綿作農家の一ねん

H.A.M.A.木綿庵(ゆうあん)  
代表 梅田正之

- 1、国内における綿花栽培の歴史
- 2、綿花の栽培作業
- 3、綿花の加工作業
- 4、栽培と加工
- 5、農家の一年
- 6、H.A.M.A.木綿庵について
- 7、活動を支える一ねん

10:50

# 1, 綿花栽培の歴史

1-0、国内における綿花栽培の歴史

国内で綿作が始まったのはいつか？

### 1-1、国内における綿花栽培の歴史

- 日本における綿作、綿業の開始期  
15世紀末～16世紀中頃と考えられる

応仁の乱(1467～1477)～戦国時代

→ 兵衣(へいい)、幔幕(まんまく)、火縄銃など

\* 当初は輸入品。朝鮮半島からの輸入が行き詰まる

### 1-2、国内における綿花栽培の歴史

戦国時代(おもに西暦1500年代)まで、

日本人は木綿製品を身につけたことがなかった

それまで、何を着ていた？

## 1-3、国内における綿花栽培の歴史

## 木綿・コットン・綿 の魅力

保温性、吸湿性、着心地の良さ、  
加工のしやすさ、シルエットの美しさ、など



綿の栽培は、またたくまに全国に広がる

## 1-4、国内における綿花栽培の歴史

真・綿(まわた)



木・綿(きわた)



繭、生糸、絹、シルク

(真名)



もめん、綿、コットン

(仮名)

### 1-5、国内における綿花栽培の歴史

- 栽培の起源については文献によって  
多少異なる見解がみられる。

〈参考図書〉

- 永原慶二『新・木綿以前のこと』  
(中公新書、1990年)、
- 柳田國男『木綿以前の事』(創元社、1938年)。

### 1-6、国内における綿花栽培の歴史

畿内(大和、山城、摂津、河内、和泉)は、  
綿花栽培の先進地域

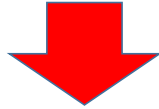


明治時代に入り、外国産の良質、安価な綿花、  
綿糸、綿布におされ、国内の綿花栽培は壊滅  
(明治29年1896、関税撤廃)

### 1-7、国内における綿花栽培の歴史

江戸時代から明治のはじめまで

農家では綿を栽培し、糸に紡ぎ、現金収入を得る



同時に、その綿花を自家用とし、家族の衣料に利用

糸紡ぎ、機織りは、農村婦女子にとっては  
欠くことのできない生活技術

11:05

## 2, 綿花の栽培作業

2-0、綿の栽培作業

・アオイ科ゴシピウム属(ワタ属)の植物は約50種



おもな栽培種は4種類

- ◇旧大陸原産    アルボレウム    (江戸時代に日本で栽培:和綿)  
                         ヘルバケウム
- ◇新大陸原産    ヒルスツム        (世界の繊維素材の大半:洋綿)  
                         バルバデンセ    (高級素材)

2-1、綿の栽培作業

綿の品種

◇アルボレウム  
和綿(アジア綿)



◇ヒルスツム  
洋綿(アメリカ綿)



2-2、綿の栽培作業

播種(たねまき)

大和では、  
八十八夜  
(5月2日頃)

\* 綿は好光性



2-3、綿の栽培作業

発芽

1~2週間





2-4、綿の栽培作業

生長

約1ヶ月



2-5A、綿の栽培作業

生長

約2ヶ月

土寄せ、追肥  
支柱立て。  
水の管理



2-5B、綿の栽培作業

防虫対策

ハマキムシ  
アブラムシ



2-6、綿の栽培作業

開花

約2ヶ月半

初日は白、  
翌日は赤に



**【綿の花】**

アルボレウム



ヒルスツム



バルバデンセ



**【何の花 ? 】**



## 【畑の様子】



## 2-7、綿の栽培作業

結実(蒴果)  
約3ヶ月半

左:和綿  
右:洋綿



2-8、綿の栽培作業

開絮 (かいじょ)

約4ヶ月

綿が吹く

七十二候  
「綿柎開」  
わたのはなしべひらく  
8月23～27日頃



2-9、綿の栽培作業

収穫 (綿摘み)

約4ヶ月～

最盛期は9月

よく晴れた日の  
午後が最適

手を保護しつつ



2-10、綿の栽培作業

綿木引き  
(片付け)  
約7ヶ月半

枯れ枝は  
焚き付け材として  
重宝された

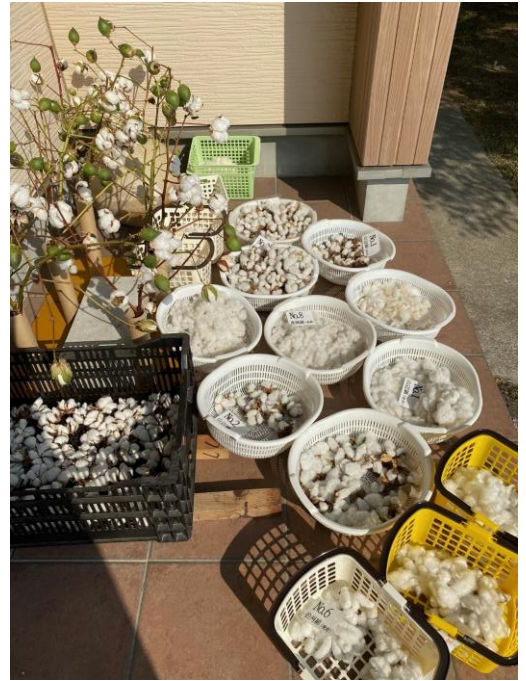


11:15

### 3, 綿花の加工作業

3-1、綿花の加工

天日干し  
(乾燥させる)



3-2、綿花の加工

綿繰り  
(わたくり)

種と繊維を分ける作業

隠居、子供の仕事



3-3、綿花の加工

繰り綿  
(くりわた)

綿繰りを終えた綿



3-4、綿花の加工

綿打ち  
(わたうち)

唐弓(右)  
竹弓(左)





3-5、綿花の加工

打ち綿  
(うちわた)

綿打ちを終えた綿



3-6、綿花の加工

糸紡ぎ  
(いとつむぎ)

老若男女を問わず、  
糸を紡いだ



3-6B、綿花の加工

糸紡ぎ

糸紡ぎ

動画データ

5, 糸紡ぎ

3-7、綿花の加工

総上げ  
(かせあげ)

紡いだ糸を  
加工しやすいように  
糸束にする



### 3-8、綿花の加工

## 撚り止め 精錬

煮沸し  
撚りを止め、  
油分や汚れを  
落とす工程



### 3-9、綿花の加工

## 草木染め

植物を煮出して  
染め液を抽出し、  
灰汁(あく)等を用い  
媒染する

花梨(かりん)の葉

\* 予想外の色が出ることも



## 3-10、綿花の加工

## 草木染め のポイント タンパク質とセルロース

動物性繊維 = 繭 シルク・生糸・絹  
○ 羊 ウール・羊毛

植物性繊維 = 亜麻(リネン)、苧麻(ラミー)  
× 大麻(ヘンプ)  
木綿(コットン) → 前処理が必要  
呉汁など

## 3-11、綿花の加工



草木の焼却灰を水で溶き、上澄み液をとる  
灰汁(あく)

3-12、綿花の加工

草木染めを  
施した糸

(植物染め)



3-13、綿花の加工

設計、計算

経糸(たていと)

緯糸(よこいと)



3-14、綿花の加工

# 整経

経糸(たていと)  
を整える



3-15、綿花の加工

# 畦取り (あぜとり)

上糸と下糸が  
交差するところ



3-16、綿花の加工

綜紉(もじり)  
(そうこう)  
通し

すべての経糸を  
1本ずつ、  
もじりに通していく



3-17、綿花の加工

箴(おさ)  
通し

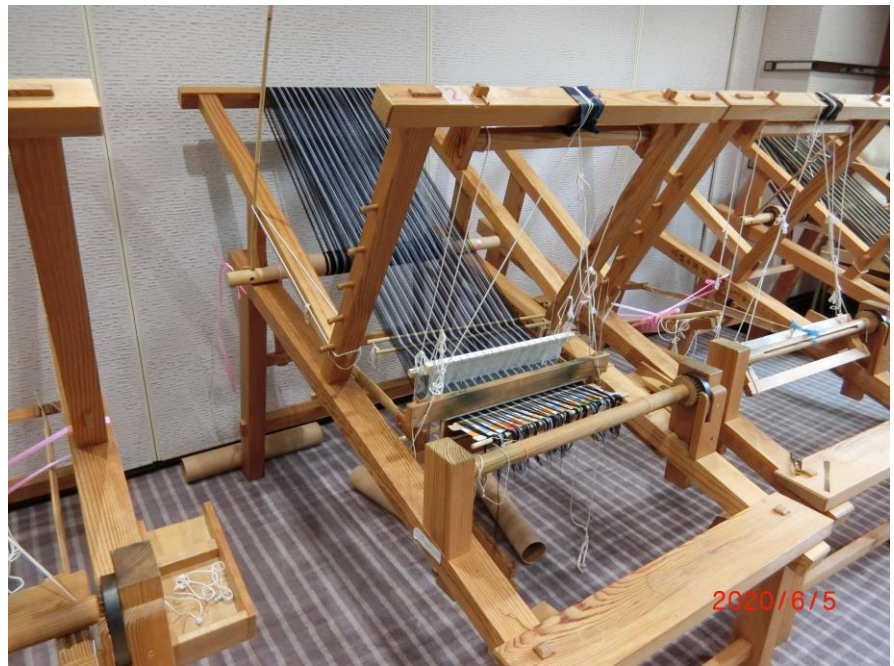
すべての経糸を  
1本(2本)ずつ、  
箴に通していく



3-18、綿花の加工

機掛け  
(はたかけ)

いよいよ織機に  
セットする



3-19、質問事項

- ①機、はた、とは？
- ②畦取り、とは？
- ③2本の踏み木、の働きは？
- ④もっともおもしろい工程は？
- ⑤手紡ぎ、手織り(手機)の魅力は？



3-20、綿花の加工

上糸と下糸

2枚綜絢  
杼(ひ)の  
通り道

開口 (かいこう)  
を確かめる

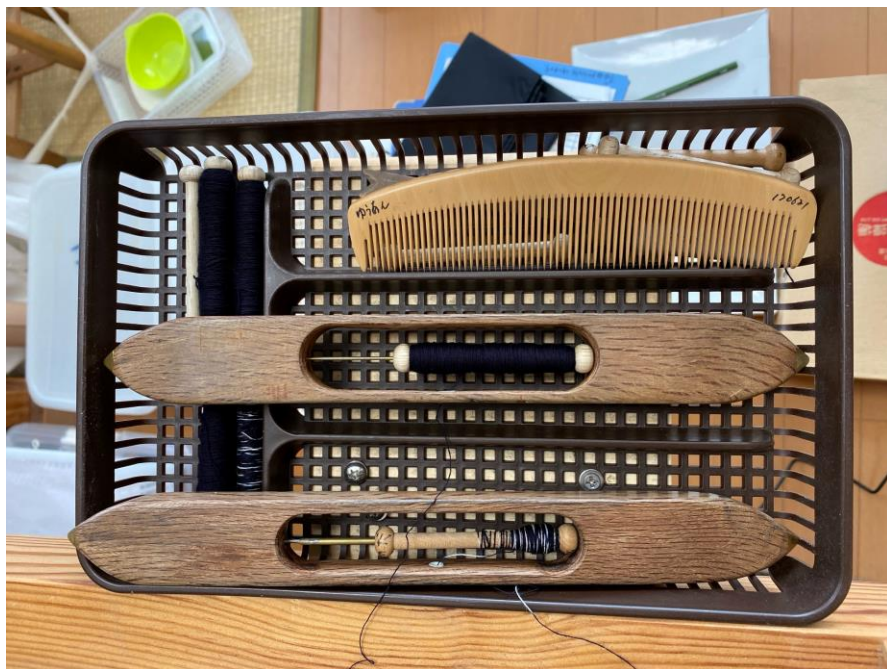


3-21、綿花の加工

機織り  
に用いる  
杼(ひ)

シャトル

緯糸を通す道具



3-22A、綿花の加工

機織り  
(はたおり)

上糸と下糸の開口部に  
杼を通し、  
箆で打ち込んでいく



3-22B、綿花の加工

機織り

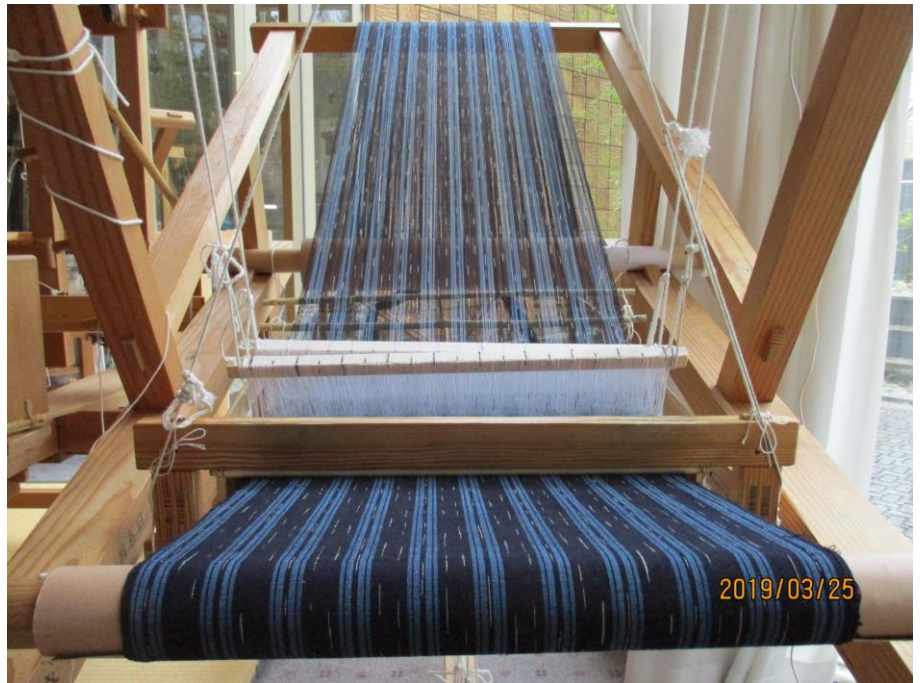
機織り

動画データ  
7, 機織り

3-23、綿花の加工

機織り  
(はたおり)

箆で打ち込みながら、  
手前にある  
千巻に少しずつ  
巻いていく



3-24、綿花の加工

織り上げ



11:25

## 4, 栽培と加工

### 4-1、栽培と加工

- 栽培作業 4月～10月
- 加工作業 10月～4月

春秋の彼岸(3、9月)が過ぎると、昼夜の長さが逆転

正月藪入り(小正月)から織り始め、五月秋が始まると止める

- 秋冬の夜長、農閑期の婦女子の仕事  
糸紡ぎ、機織り



家族の衣料を  
調べ、内職として  
家計の足しに

#### 4-2、栽培と加工

- ・大和では、正月の**ナラシモチ**は、

### 綿の豊作を願って作る習俗

大切な嫁入り道具  嫁ぐ娘に手織りの反物を

#### 4-3、栽培と加工

☆『改訂天理市史(下)』より

**機織りは暮しを支えるたいせつな女の仕事の一つであった。**  
家族の衣類、仕事着・アイ着・よそ行き着物などは、  
女が暇をみつけては機で織り、着物に仕立てて  
用を足してきたのである。

もちろん、**布団をはじめ生活に必要な布類も**  
ほとんどが**女が家で織った。**(299頁)

- ・ヨメイリに、**そうして織った着物が一枚でも多いと**
- ・働き者としての**てがら**でもあった。(301頁)

#### 4-4、栽培と加工

父が、祖父が、家族が苦勞して育て、収穫した綿、  
母が、祖母が、家族が苦勞して作ってくれた衣類を  
大切に生かし、どこまでも生かし切る

Reduce(リデュース)、

Reuse(リユース)、

Recycle(リサイクル)



生活に根ざした  
自然な営み

11:30

## 5、農家の一年

『山本家百姓一切有近道』より  
(大和国山辺郡乙木村、文政6年1823)

\* 日本農書全集第28巻所収

### 5-1、農家の一年

正月元日。朝、雑煮(餅、里芋、大根、豆腐)

(P127) 昼、雑煮(餅、里芋、大根)

夕、飯。里芋、大根

二日。朝、若水で炊いた雑炊。

昼、飯。なます(大根、人参、かきの和え物、みかん)、汁(くじら、いちょう切りの大根、牛蒡)

平椀(干シアワビ、山芋、牛蒡、人参、水菜の炊き合わせ、焼物(上席はお頭付の鯛、その他はぶりの切り身)  
酒の肴(牛蒡、数の子、煮豆の三品)

三日。朝、茶粥

昼、雑煮

夕、飯。おかずは里芋、大根のみ

### 5-2、農家の一年

正月六日。六日年越しの祝い

(P129) (大根汁、里芋、大根、牛蒡)

七草粥を炊き、

「七草たたき」をおこなう

「ぶとの口」を焼いて祝う

災いを追い払う

七日。七日正月。七草粥

八日。昼食、ぶりの焼物、大根の汁、里芋、大根、牛蒡

### 5-3、農家の一年

◇七草たたき → 七種類の菜を、吉方を向いて打ちたたく

「ななくさなずな 唐土の鳥と日本の鳥とかきまぜてばたばた」

「トントト 正月年をかさねて 弱いお客はつい門口に」

◇ぶとの口

→ 正月二日に氏神である夜都伎神社から五穀豊穰のしるしとしていただくうすっぺらな餅

### 5-4、農家の一年

三月三日。朝食、白酒、赤飯、汁、焼物(塩漬けぶり)、里芋、  
(P141) 牛蒡、干し大根

五月五日。朝食。白米の飯。わかめ汁、切り干し大根、竹の子、  
(P174) ふき、切り身の焼魚

七月十四日。昼食、茄子の汁、酒。夕食、汁、くるみ餅、酒  
十五日。朝食、茶粥。昼食、汁、茄子、南瓜、酒の肴。夕は粥。  
十六日。昼食、汁、干し魚の焼物、するめ、茄子とアジの  
(P205) 炊き合わせ。猪口(瓜のなます)、酒の肴。



### 5-5、農家の一年

九月九日。赤飯、根深ねぎのに入った汁、塩漬けの魚、南瓜、里芋  
(P226)

九月 祭り。昼食、餅、なます(ずいき、れんこん、豆、しょうがの酢の物、  
みかん)、すまし汁(油揚げ、菜、しめじ)、  
壺(えい、里芋、牛蒡)、焼物(えそ)、

夕食、茶、赤飯、猪口(こんにゃく、かきの白和え)、  
平椀(かまぼこ、里芋、根深ねぎ、まつたけ、牛蒡)、  
酒の肴(れんこん、牛蒡、たこ)、  
硯ふた(焼きまつたけ、梨、かまごこ、卵、焼芋)

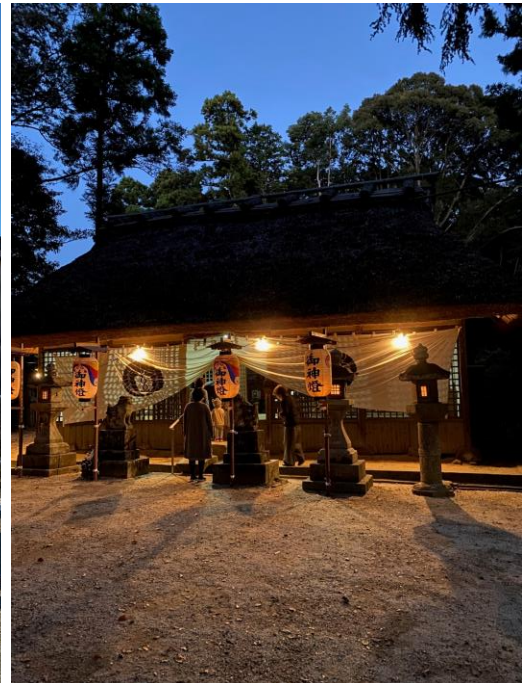
(P233)

### 5-6、

夜都伎神社

(やとぎ)

秋祭り



## 5-7、農家の一年

十月亥の子。夕食、餅、根深ねぎの汁、里芋、大根、こんにゃく  
(P251)

十一月 冬至。冬至粥(小豆粥)  
(P259)

十二月 大晦日。(朝、柵の小枝を門口にさす。  
(P275) 夕方に豆まきをおこなう)

## 5-8、農家の一年

日常と非日常  
(生活に彩りを添える工夫)

すべて、「いのち」あるものに

支えられ、育まれて、在る、ことへの感謝

生かす知恵、生かし切る知恵  
(幼い頃から、自然と身につく)

5-9、

十五夜



11:40

# 6, H.A.M.A.木綿庵について (ゆうあん)

## 6-1、H.A.M.A.木綿庵(ゆうあん)について

こころはればれ、**晴れ**(Hare)の日も、  
こころしとしと**雨**(Ame)の日も、  
**前**(Mae)を向いて  
**歩き**(Aruki)たい

生きづらさを抱えた人たちの「居場所」として

## 6-2、H.A.M.A.木綿庵(ゆうあん)について

H.A.M.A.木綿庵(ゆうあん)

はま ・ ゆうあん

はまゆう ・ あん

**浜木綿・庵**



6-3、H.A.M.A.木綿庵(ゆうあん)について

支援活動を始めようと思い立ったきっかけ、

自分自身が苦しんだ経験から

6-4、H.A.M.A.木綿庵(ゆうあん)について

なぜ、綿なのか？ なぜ、手作業にこだわるのか？

明日につながる、夢があるから

農福連携、生涯学習、文化継承、SDGs...

### 6-5、質問事項

- ① オーガニックコットンについて
- ② 綿の魅力(前向きになれる秘訣)
- ③ 年間収量
- ④ 良かったこと、苦労したこと
- ⑤ 引きずり込まれた経験

11:50

## 7, 活動を支える一ねん

\* 大前提としての「喜び」に加えて

### 7-1、活動を支える一ねん

- お手許の資料をご覧ください。

- 本居宣長『初山踏』（寛政10年、1798）

「とてもかかってもつとめだにすれば、  
出来るものと心得べし」

### 7-2、活動を支える一ねん

- 大蔵永常『綿圃要務』（天保4年、1833）

「できぬ事ハあるべからずと力を入、  
踏込て始むべし」

12:00

(糸紡ぎの実演、質疑応答)

本日は、ありがとうございました。